

(00:00:00) ゲスト：松木ひろし①

東海林:こんばんは。「カフェ・ラ・テ」マスターの東海林桂です。

さらだ:ママのさらだたまこです。

東海林:きょう2月21日は「夏目漱石の日」だそうです。夏目漱石の日ってすごいですね。

さらだ:そういう日があるんだ。何か夏目漱石にまつわるエピソードがあるわけですね。

東海林:はい。明治44年のことなんですけど、当時の文部省が夏目漱石に文学博士の称号を贈ると決めたんですけど、夏目漱石は「自分に肩書きは必要ない」と辞退してしまった。それが2月21日だということです。

さらだ:ま、博士様でなくてももう大文豪。

東海林:夏目漱石っていう名前だけで肩書きだもんね。

さらだ:そうですね。

東海林:誰もが知っている。そうなりたいですね。

さて今日のお客様なんですけど、脚本家の松木ひろしさんです。

さらだ:松木ひろしさんといえば、私たち子どものときに…。

東海林:いっぱいドラマ観てました。憶えてます、石立鉄男さんの数々のドラマ、『パパと呼ばないで』とか『雑居時代』『水もれ甲介』。西田敏行さん主演の、あの『池中玄太80キロ』。そういう名作ドラマの数々、さらに『ニッポン無責任時代』というクレージー・キャッツの映画。

さらだ:なるほど。

東海林:松木さんは1928年、昭和3年生まれですから84歳。大先輩です。

さらだ:そんなにおなりになるの？

東海林:それ以上に驚いたのは、ニッポン放送とかフジテレビ開局時に社員だったことで。

さらだ:そういう経歴の持ち主なの。

東海林:はい。今回はラジオやテレビの創成期を聞いてみようかと思います。

さらだ:そっか。単に脚本家を目指したんじゃない。

東海林:制作の立場だった。

さらだ:ニッポン放送って、ちょっと私のデビュー時に関わってるからいろいろ伺いたいと思います。

東海林:それではまいりましょう。

さらだ:今夜も午前4時までごゆっくりお付き合いください。

＊

明治座からニッポン放送へ

東海林:早速今夜のお客様ご紹介いたしましょう。松木ひろしさんです。

松木:こんばんは。

さらだ:こんばんは。

東海林:初めまして。

松木:初めまして。

さらだ:84歳には見えないですね。

東海林:お元気ですね。

さらだ:いまでもラブリーな感じが。

松木:ころっと逝きますよ。こういうのは(笑)。

さらだ:いやいいな。素敵。

東海林:ここのラジオニッポンが今年開局 55 周年です。で、ニッポン放送の開局が 1950 年、昭和 25 年 7 月 15 日。

松木:あのころ僕は明治座にいたの。初代の中村吉右衛門が死んで葬式に出た後に開局したんだ。

さらだ:そうなんですか。

松木:最初は僕、明治座入ったんです。

その前は芝居やってて。で、映画会社へ入ろうと思ったんだけど入れなくて。明治座に入っちゃったんです。なんだか知らないけど。

さらだ:劇場ですよ。

松木:いきなり歌舞伎の世界ですよ。歌舞伎・新派・新国劇なんて僕は全然知らなくて。そういうところに 4 年間いたんですけど、ニッポン放送が舞台中継をするので明治座へ来るでしょ。それで友達になったんですけど、その 2 人が「舞台中継やってんだけど手が足りないから、お前明治座辞めて来てくれ」って言うんです。いろいろあったけどとにかくそれで入ったんですけど、時系列でいうと開局から 3 ヶ月か 4 ヶ月ほど後になる。

東海林:7 月開局ですから 12 月ぐらいに入られたんですか？

松木:何月に入ったかちょっと記憶にないんだけど。遅れて入ったんです。

東海林:ニッポン放送での制作に。

松木:でも入ったら舞台中継。なにしろ、まず舞台中継で入ったもんですから。当時ニッポン放送には高橋博という NHK 出身のアナウンサーがいたんです。その人がニッポン放送のアナウンス室長であり、彼が「来月は歌舞伎座と演舞場やるよ」と言うと、こっちは今まで働いてたんだけど明治座行って、「中継お願いします」って頭下げて舞台中継。マイク持ってって中継やってました。

(00:05:03)

高橋さんが舞台上でアナウンスしてというのを当初やったんです。

東海林:それって生放送ですよ？

松木:いや録音です。

東海林:録音が出来た？

松木:録音は出来た。

東海林:でも録音というと、テープで…。

松木:テープですよ。当時のプロデューサーっていうのは皆ストップウォッチを首にぶら下げて、ポケットにはさみとスコッチテープを持ってて。それで自分の録ったテープを編集室に行って、こう聴きながら。

東海林:はさみでプチってやって。

松木:テープでこうやって。それ、夜中まで作業して自分の番組を作って帰ったんです。

舞台中継は1時間でしょ。あの頃、だいたいラジオってのは15分か30分番組だったから。1時間っていうと、こんなテープが、リールが大きいんですよ。だから編集も大変でしょ。舞台は2時間、3時間のドラマですから。それを1時間にまとめて、しかも全部何時間もかけて編集して。それから夜中になって最後にまた1時間聴かなくちゃいけないの。

東海林:時間を計って。

松木:これがもう嫌で。

さらだ:でも長いものを短くして、リスナーの方が聴いてもお話がわかるようにすることになっちゃうわけですよ。

松木:それはなりますよね。全部、例えば通し狂言だと『義経千本桜』。あれは、なんとかの場を中継します、って言えばそこだけ中継すればいいんで。全部やる必要はないですから。

東海林:舞台中継がメインの仕事だったんですか？

松木:入った時はそうでした。それからドラマも。

東海林:ラジオドラマですか？

松木:ええ。

さらだ:その頃はまだ、ラジオドラマってまだ黎明期なんじゃないですか？

松木:そうですね、でもけっこうやってましたよ。15分の帯ドラとか。ニッポン放送では、何だろう。

東海林:当然『夜のドラマハウス』なんかまだないですよ。

さらだ:それはまだ。脚本家はどんな方？ 例えば演劇の方が書かれたりとか、劇作家。

松木:僕が一番はじめにドラマやったのは『空手小僧の冒険』って漫画チックなものでした。

御荘金吾さんっていう脚本家がいる、中学生だった今の幸四郎、染五郎ちゃん。

小学生の萬之助ちゃんと2人で来てやりました。

さらだ:それ、二代目吉右衛門さんってことですか。

松木:ええ。初めてのラジオで。

さらだ:兄弟で。

松木:それをずっと。それは御荘さんが書いたんですけど。

東海林:効果音とかって。

松木:小豆を。

さらだ:波の音とか。

松木:ざあっとやったり。馬の鳴き声とかは、ディスクなんですけどね。雨の音。

東海林:うちわに豆つけて。

松木:豆つけてパタパタやったり。風は扇風機みたいな回したり。

東海林:効果さんっていうのがいたんですか？

松木:いました。ニッポン放送は、カノウさんっていう、大御所がいて。それから上野さん。

さらだ:上野修さん。のちのドン・上野になる。

上野さんは元々NHKの放送劇団出身ですもんね。

松木:その上にカノウさんっていうすごいボスがいて。

さらだ:そうなんですか。

松木:これが怖くて。本当に僕、ドラマやる時まず効果の人に気遣っちゃうぐらい怖かった。

さらだ:その時はディレクターという立場でやって？

松木:ラジオはプロデューサーでしたけど。

東海林:どんなふうに怖かったんですか。

松木:昔気質の人でしたね。

だいたい効果っていうのは、言葉はちょっと悪いけど“日陰”のほうでしょ。

東海林:当時、はい。

松木:だから、自己主張するためかな。特に僕ら若いプロデューサーなんかは馬鹿にされて。怒鳴りつけられましたけど。でも、効果の人ってのは皆上手かったですし。カノウさんっていうのは芝居も詳しいし。

例えば芝居で「金魚～、金魚」っていう売り声があるでしょ。あるいは「はさみ、包丁、剃刀研ぎい」っていうあの売り声、江戸時代から明治、大正の売り声を全部マスターして、憶えていたね。

さらだ:ご自分で？

松木:そうそう。

東海林:自分でやるんですか？

松木:ええ。時代劇で売り声なんか入れる時はそれをパーっとやるんです。それ

から、僕がだいぶ後になって、単発ですけど新田次郎さんの『おとし穴』っていうドラマをやったんです。これは自分で見つけてきた。鉄砲持った猟師の話ね。雪道を歩いてて、おとし穴に落っこちちゃって。そこに狼が一匹いるんです。その狼と、2時間、3時間の対決です。喰うか喰われるか。それが小説なんです。絶対演劇じゃ出来ない題材だし、これはラジオに良いじゃないかと。

東海林:狼、喋りませんよね。

松木:穴の中で台詞なしで一人、狼のうなり声だけで。それでラジオ出来るだろうと思ってやったんです。それで民放賞とりまして。主役は先代の幸四郎さん。

さらだ:白鸚さんになりましたね。

松木:そう、白鸚さん。彼にお願いしてやりました。主人公が、逃げよう、やっつけようと色んな葛藤があって、最後は狼に食べられちゃう話なんだが、その噛みつくところの効果音が幸四郎さん、どうしても気に入らないって言うんです。で、カノウさん、1キロぐらい肉買ってきて。マイクに向かってカア〜と本当に生肉をかぶって。

さらだ:生肉？

松木:それぐらいの人なんだ。昔気質なんだ。

東海林:すご。

松木:今だったらちょっと考えられないけど、昔はそういうことやってた。

東海林:うわあっと生肉を。

松木:生肉食っちゃった。びっくりしました、僕も。

さらだ:へえ。すご。

東海林:効果命。

さらだ:リアルな音を出すために、生肉…。

松木:そうですね。またカノウさんで思い出すのは——あのこと徳川夢声さんが、『孫悟空』をニッポン放送で連続で朗読してた。その時は、朗読と効果だけです。そこでいろんなことをやってたな。例えば水が凍るという…。

東海林:水が凍る音？

松木:ピピピって凍ってく場面です。それを音でやってくれって言うんです、夢声さんが。で、カノウちゃんが、どうやりゃ氷が張る音が出来たって一晩いろいろ考えて。そうして編み出したのが、セロテープをくっつけてピピピって剥がすんです。その音を録ってきて、逆回転したんです。

東海林:ええ。

松木:ピピピって。そしたらなんか氷が張ってきたって臨場感が。とにかくそういうこと考えるのはすごかったです、職人で。僕らはお願いするばかりのペーパーで、よく怒られましたけど。

さらだ:そんな経験まで。

松木:よく知ってるから、芝居も。

＊

学生時代からふりかえると…

東海林:開局のころ、どのような番組がありました？。

松木:例えば、高崎一郎っていう…。

さらだ:フジテレビ出身の。

東海林:「高崎一郎の～」とかいって、『オールナイトニッポン』ってやってましたよね。

松木:社員のくせにてめえで出てるってのはどういうんだって。

東海林:「どうぞどうぞ」とか。あれ、糸井五郎さんだ。

松木:あれは、歌のない歌謡曲っていう…。今のカラオケの走りですよ。

東海林:演奏ものですよ。

さらだ:そっか、歌がないから。

松木:そうそう、曲だけで。当時ラジオではちょっと珍しかったんです。聴いてる人に歌わせる番組。

さらだ:一緒に歌ってくれる。

松木:だからカラオケの発想ですよ。カラオケやっちゃえば良かったのに。発明すれば。

さらだ:そこで発明してれば。

松木:がっばり儲かったのに。

東海林:そうですね。

さらだ:惜しい。

松木:それからクイズも。ニッポン放送の第一スタジオってそんなに大きくないんですけど、お客を入れて…。

さらだ:昔はありましたよね。

松木:やりました。僕は一度あれをやってみたかったけど、出来なかった。

東海林:何をですか？

松木:ドラマと舞台中継ばかりで、バラエティ番組は出来なかったです。

東海林:そうだったんですか。

さらだ:どちらかと言うと創作的なほうにいて。

松木:そうですね。

さらだ:そうすると、ニッポン放送勤めながら脚本の方に行くきっかけみたいなのは…。

(00:15:03)

松木:少し話を逆転させるけど、僕は五中（現小石川高校）を卒業して東高、東京高校っていうのに入ったの。でも入った途端に、半年で終戦だったんです。本当は文科に行きたかったんだけど、戦争中のときに文科に行くと兵隊に採られるんです。それで理科へ行った。

でも算数とか全然出来ないから理科なんてまるで不向き。学校じゃ劣悪な成績でした。おまけにテニス部へ入っちゃったんです。

東海林:おしゃれじゃないですか、その時代のテニス部って。

松木:僕、小さい頃から野球が大好きで。プロ野球は昭和8年ぐらいから見てるんです。スタルヒンとか、荏田とか。あの時代から見てるから野球ばかりやって大好きだった。だから終戦の天皇陛下の詔書聞きながら、「また野球が出来る」と思ったわけ。それで高等学校で野球やろうと思って。入学して、記念祭か何かで野球のクラス対抗試合があって、僕はホームランか何か打ったんです。そしてテニス部の奴が目つけて。そのころ皆、終戦後だから部も何もない状態から部を作ってるんです。「運動神経ある奴集めろ」っていうんで、テニス部から勧誘されて。

東海林:野球部はなかったんですか。

松木:あったんです。

さらだ:あったにもかかわらず。

松木:どういうわけか勧誘されて入っちゃった。

東海林:テニス部に。

松木:つまり、毎日毎日テニスの練習で勉強なんか全然しなかった。理科なんて、勉強しなかったら通るわけないんです。試験で落第、留年するとテニスのインターハイ出られないんです。

東海林:厳しかったんですね。

松木:僕は不思議に、1年入った時からわりとテニスが上手かった。本当に上手くなっちゃったもんだから、「あいつを落っこさないために」って試験の時にはパッと3人ぐらい前に来て、はじめの試験の30分ぐらい。オッケーだった時に、前が紙を垂らしてくれるわけ。それを写して合格して、やっと3年卒業した。落第しないで。

東海林:カンニングっていうことですね。

松木:そう。毎回です。すごく上手くなりました。

東海林:それで、卒業。

松木:だから大学なんか受かるわけない。

東海林:それで大学受験に失敗したと…。

松木:だって当時は高校だったって、東京で六つか七つしかなかったです。一高(00:18:17)とか都立とか、成蹊、成城。東高に学習院と。六つしかなかった。だ

からインターハイも6チームしかない。そこへ入ると必ず東大、皆行くんです。東高でも、殆ど東大行きます。ちょっと落として京大。

東海林: 東大、京大。

松木: だいたい皆東大です。だから僕も「東大受けなくちゃいけないのかな」と思って東大受けたんです。でもそんなの受かるわけない。2年失敗しました。

東海林: 二浪したんですか。それでその間に映画の勉強を？

松木: はい。浪人っていうのは、もう気分が晴れないで何もすることがない。うずうずしてたら、終戦直後から映画がパーッと入ってきたので洋画は夢中になって観たんです。

東海林: 記憶してる作品っていうと。

松木: ありますよ、いっぱい。一番はじめにきたのは『心の旅路』。これは知らないかな。

東海林: 記憶喪失の話？

松木: よく知ってるな。あとはビング・クロスビー主演の『我が道を往く』とか。
(00:20:01)

とにかく1年に100本以上観たでしょうね。1日に3本観たり。それまでは軍国映画ばかりだったでしょ。

東海林: 戦争が終わってがらっと変わったわけですね。

松木: ワーッときたもんだから夢中になって。外人はきれいだし、一生懸命観た。大好きな女優さんもいた。そういうことで映画好きになっちゃって、映画の世界に行こうと思ったんです、浪人してて。

それで鎌倉アカデミアの映画科ってのに入ろうと思った。しかし鎌倉まで行かなくても東京の二松学舎かなんかで講座をやってたんです。だからそこへ入った。映画科っての。牛原虚彦さんみたいな監督だとかプロデューサーが実際に来てくれて授業を受けて。ここで一生懸命映画やろうと思って。

東海林: 脚本の勉強？

松木: いや脚本じゃなくて、映画づくりの…。

東海林: 演出論みたいなのですか？

松木: そうですね。

東海林: 監督？

松木: そうですね。役者は駄目だから、監督がやりたかったです。で、やってたら、半年か1年で潰れちゃったんです。

さらだ: そうなんですか。

松木: 鎌倉アカデミアの方はまだあったと思うけど、その講座が…。

東海林: なくなっちゃった。

松木: 二松学舎といっても分校だったんですよ。なくなっちゃったんで、皆で

集まって「明日からどうしよう」って。お金がなくて映画は作れないけど、芝居の稽古なら出来るから劇団作ろうっていうんでコウモリ座っていうのを作りました。

どうせ映画にしても芝居が基本になるから芝居の勉強だと、舞台で作品取り上げて稽古したんです。毎日集まって半年稽古して、二日か三日しか公演しなかったけど。芝居はそれ一回きり。

東海林: その一回で終わりですか。

＊

三田佳子の名付け親となる

松木: 脚本やるっていうのは、芝居から入っちゃったわけ。それで東映に入ろうかと思って一生懸命運動したけど入れなくて。結局明治座に放り込まれて…。

東海林: 明治座の文芸部に…。

松木: そこで北條秀司さんとか菊田一夫さんとか中野実さんとか、飯沢匡さんとか、そういう作家の方とお付き合いした。北條さんは僕の仲人なんです。だからそういう方たちの仕事ぶりを見てて、脚本っていうのは素晴らしいなと思った。それで弟子にはならないけど北條さんのところへ行って北條さんのグループ、小幡欣治など7、8人で脚本のゼミっていうか、皆で書いてみて持ち寄って読んで批評する、っていうのをやってたんです。

そこから脚本っていうのを始めたんです。もちろん書いたものなんかお金になんない。明治座やめてニッポン放送入るとニッポン放送の東芸っていう劇団があって、その人が「芝居やるんでお前本書かねえか」って。そこで初めて本書いた。でも、ニッポン放送時代からラジオはテレビを書いちゃいけないっていうことになってて。

東海林: え。

さらだ: ラジオはテレビの脚本を書いてはいけない？

松木: いけない。

さらだ: 倉本さんなんかは、偽名っていうか、知らんぷりしてやってたっていう。

松木: 倉本さんは書いてたの？

さらだ: 倉本聰さんなんか、書いてて。ある時、この人を探せとか呼んで来いとか命じられたけど、それは他ならぬ自分のことだったって。それは倉本さんがそろそろ売れる頃で。そういう有名な逸話があったんです。

松木: 僕たとの時代は他局の放送、テレビ、自局ももちろんだけど書きちゃいけないって。でも暗黙のうちに、芝居ならいいって風潮が。それで芝居やったんです。それも処女作が、ニッポン放送の隣のビデオホールで上演。

東海林:有楽町のそごうだった…。

松木:そうそう。あそこでやったんです。

東海林:現在そごうの上。じゃない、ビックカメラの上だ。

松木:いまビックカメラになっちゃったの？

さらだ:ビックカメラになっちゃったんです。

(00:24:58)

東海林:ビックカメラの上の、よみうりホールとかいう名前になってる。

さらだ:昔、ビデオホールだった。あそこから中継とかありましたよね。

松木:その処女作が、30年ぐらいですね。二時間。それをいまもやってます、劇団が。今度3月に、どっか小石川のほうでやりますけど、劇団。

東海林:それは松木さんとは繋がりのある劇団なんですか？ それとも全然繋がりは無い劇団で？

松木:はい、別に。

さらだ:作品だけがずっと。

東海林:一人歩きして。

さらだ:受け継がれていく。

松木:50年前の芝居を今頃やられても恥ずかしいんだけど。

さらだ:タイトル、何ていうんですか。

松木:『娑婆に脱帽』。

東海林:『娑婆に脱帽』は『日本戯曲全集』に収録され、傑作だと書かれてます。

松木:便利屋の話なんです。刑務所帰りの四人組が金がねえんで便利屋を始めるって話。あの頃便利屋なかったからうけたし。納谷悟朗なんていうのが出てたの。

東海林:声優の大御所だ。すごい人が出てんですね。

さらだ:名優ですね。

松木:それから三田佳子の学生の頃。

さらだ:美術大学。女子美の。

松木:美大生。

東海林:かわいかったですか。

松木:ほんとにかわいかった。石黒っていうんだ、あの子。

さらだ:そうなんですか。

松木:本名の石黒嘉子って芸名で出てるから、女優さんじゃ地味じゃないかって。じゃ、演出の嶋田親一っていうのと二人で名前考えてやろうって。で、電車の中で一生懸命ああでもないいつたら、ちょうど三田駅に来たんです。何線ですかね。

東海林:都営地下鉄ですね。

松木:「三田～、三田～」って、「あ、三田は良いね」なんてことで決まった。

そのころ三船とか三國とか…。

さらだ:「三」がつくと縁起が良い感じ。

松木:「三」が多かったの。だから三はかっこいいなと思って三田にしたんです。

東海林:三田佳子さんの名前の由来がわかった。

松木:電車のアナウンスだった。それで名前をつけてたんですけどちょっとトラブルがあって、劇団で一本か二本やって彼女は辞めちゃいましたけど。それから東映行ったんです。

さらだ:でもずっとその三田佳子って名前を使われて、現在に至るわけですね。

松木:そうですね。

さらだ:ご本人は知ってるんですか？ 「三田、三田」ってアナウンスとかって。

松木:もう何回も話したの。

東海林:びっくりしましたね。三田佳子さんの名前がそんなところで。それで、今のラジオとか劇団とかをなさってたってということなんですね。

ここで一曲何か。思い出に残る曲があると伺ってるんですけど。

＊

思い出はダミアの「暗い日曜日」

松木:東大受けて二回失敗しましたよね。一回目は英語で受けたんです、科目を。僕と一緒に受けたのが、中学の友達で澁澤龍彦っていうサドの研究会で有名な。

さらだ:ほお。

松木:あいつが親友でして、一緒に東大受けようって。それで赤門で待ち合わせたらいくら待っても澁澤が来ないんです。何やってんだろうなと思ったら、あいつ、本郷三丁目の交差点を赤信号で渡っちゃったもんだから、おまわりにとっつかまって交番に連れていかれちゃった。「東大の受験だから」と言っても、全然おまわり聞いてくれない。で、遅れちゃって。いくら待ってもしょうがないから僕一人で受けに行きましたけど。あいつ遅れて一年目駄目だったんです。

東海林:かわいそう。

さらだ:赤信号で。

松木:「じゃあ、お前が駄目だったんなら俺もやめる。どうせ受からないんだから。一日目でやめよう」っていうんで、僕もやめちゃって。ちょっと憂うつな気分になっちゃったけど、お互いに落ちたことを反省しようって。二人で澁澤ん家行って、ダミアの「暗い日曜日」を聞いたんです。平気だって思っても、落っこったなんてやっぱり嫌な気分でしょ。ダミアの「暗い日曜日」っていうのは、歌を聴いた人が聴いただけで自殺したっていう…。そういう人が何人もいたと言

われています。

さらだ:すごい。とことんまで落ち込むんですね。

松木:そうしたことを澁澤から講釈聞いて。

(00:30:02)

すごいしゃがれ声なんですけど、それ二人で聴いて、「ああ」なんて。それも入
れて思い出。僕は二年目、もう一回受けたのかな。その時は澁澤の影響で、「英
語よりフランス語のほうの問題優しいんだから、フランス語でやれ」っていうん
で。一年間しょうがないからフランス語習って、何も出来やしない。二年目はフ
ランス語で受けたんです。もちろん落っこったけど。あいつは二年目か三年目で
受かったんです。その澁澤の思い出なんです、東大。

東海林:わかりました。

さらだ:受験の。

松木:東大受験の失敗の思い出なんです。

東海林:それでは聴いていただきましょう。ダミアで「暗い日曜日」。

音楽開始(00:30:48)

音楽終了(00:34:05)

東海林:さ、暗くなっただけでしたでしょうか。

さらだ:いや、その後に希望もあるし、素晴らしい人生があるよ。

東海林:聴いていただきました。ダミアで暗い日曜日でした。

＊

テレビに転職する

東海林:さて、ニッポン放送に入社して、劇団も立ち上げたというお話も伺えた
んですけど、今度は、やがて転職されるそうですね。

松木:ええ。だいたい、明治座も四年、ニッポン放送も四年ですね。ニッポン放
送で三年ぐらい経ったところにTBSが始まったんです。

東海林:TBSの

さらだ:テレビ。

松木:ええ。TBSテレビが昭和30年に。日テレはすでに出来ていた。

東海林:日テレは昭和28年で。

松木:ええ。次はフジテレビを作ろうと。

(00:35:03)

東海林:次、フジテレビ。

松木:ええ。それで、ニッポン放送と文化放送が話し合って、共同で人を出して
作ろうっていうことで、僕はニッポン放送からフジテレビへ行けっていう命令。

で、開局の一年前にニッポン放送をクビっていうか辞めて。それでフジテレビに。

東海林:フジテレビの社員になった。

松木:ところが何もありません。河田町の方にまだ出来てなかったし。

さらだ:社屋もない？

松木:建物だけはあったけど、がらんどうで机も椅子も何もなくて。

さらだ:ええ!? スタジオのセットがないのならわかるけど。

松木:スタジオなんてとんでもない。ほんとに何もありませんから。1年前にフジテレビ行けって言われて行ったら、がらんどうで行く所がありません。

さらだ:会社行って座る所とか、席がない。

松木:それで喫茶店に皆で集まって、「今日何しようか」。

さらだ:ええ。

松木:とにかくニッポン放送から仕事外されちゃったもんだから、何もやることがない。「じゃ、麻雀でもやろう」って。そのうち、「麻雀だけじゃ申し訳ない」と言ったら、局から、「じゃお前、勉強で皆映画観に行け」って。勉強で映画を観に行くんですよ。

東海林:ええ。

松木:つまり朝来ると、映画館の切符をくれるわけです。で、昼過ぎまで映画観てお茶飲んで。麻雀やろうか、って夕方から麻雀して。そういうのが半年ぐらい続いて。

さらだ:お給料は？

松木:給料はちゃんとくれるんです。

さらだ:すごい。

東海林:そうすると、フジテレビで映画観て、麻雀して、ずっと半年。

さらだ:でも開局に向けてのイメージは、普通もっと忙しくしてる感じがするんですけど。

松木:建築屋さんは忙しかったんでしょうけど。

さらだ:そうか、建築は。

松木:僕らは出来てからやりや間に合うわ、なんて。でも半年前ぐらいから「これじゃいけない」って、岡田太郎とか森川時久っていう映画監督。それから五社。

さらだ:五社英雄さん。

松木:それからさっきの嶋田親一っていうその新国劇。そういうのが5、6人集まって。「じゃ、映画作ろう」。

さらだ:テレビ局なのに？

松木:いや、稽古として。

東海林:要するに番組作りの下地で映画作ろうと…。

松木:お金なんかないですから、僕が本を書いたんです。

東海林:おお。シナリオデビュー作ですか。

松木:タダだもん、誰も頼めない。それで森川時久が演出して、あとの連中はカメラ持ったり小道具持ったりして走り回って、オールロケで頼みに行くわけ、普通の店へ。図々しく銀座の馬里邑なんか行ったんだ。

東海林:そうですか。おかしいな、それ。

さらだ:役者さんはどうされたんですか？

松木:名もない役者を使って。要するに、雰囲気味わうだけのことです。勉強だったから。

さらだ:映画という、映像を作るという雰囲気。

松木:っていうことで30分、曲りなりになんとかかんとかで作ったんです。

東海林:つまりフィルムで撮ったわけですね。

松木:そう。それはフジテレビの試験放送の時に流しました。

東海林:どんな物語だったんですか。

松木:忘れちゃったけど、ラブコメディ。

東海林:それは松木さんの、いわゆるテレビ番組としての最初の作品になるわけでしょ？

松木:そうなりますね。

東海林:試験放送がデビューってすごいですね。

松木:それが終わってからだんだん局にも机、椅子が揃ってきたから。最初はトイレさえなかったんです。だから部屋の隅にブリキ缶置いて。

東海林:トイレに？

松木:うん。

東海林:すごいな、フジテレビ。

松木:そんなことやった思い出もあります。

東海林:まだ開局前のことですか？

松木:する前の年の暮れでしたね。

＊

日テレで番組づくりを1か月

それで、まだ放送のスタジオも使えないんで、日テレへ勉強に行けって言われて。
(00:40:01)

東海林:修行に。

松木:日テレにひと月ぐらい通いましたからね。

東海林:麹町ですか？

松木:ええ。それで決めてもらって番組に付いて、そこで初めて実際のテレビの

イロハを…。

東海林:番組というものに。

松木:ええ。その時のプロデューサーは松本さんっていう中年のおじさんでした。その現場で実際の放送に…。

東海林:立ち会った。

松木:こちらはADの、もう一つ下ぐらいの立場かな。

さらだ:ADでもファーストがいたらサードみたいな。一番下。

松木:でも良くしてくれて、いろいろ教えてくれました。ただ、付いた番組がひどかった。『OK横丁に集まれ』っていう…。

さらだ:OK牧場じゃなくOK横丁（笑）。

松木:当時だからもちろん生ですよ。

さらだ:生のドラマ？

松木:日曜の正午ごろの 30 分っていうバラエティドラマ。つまりOK横丁に集まった人たちのコメディ。プロデューサーがコメディアンを全部集めたんです。藤村有弘だとか逗子とんぼとか、エリックなんかが来た。

さらだ:E・H・エリックさん。耳がぴこぴこ動いてた。

松木:で本が。誰が書いてたか知らないけど、とにかく出来ないんです。

東海林:出来ないというのは。

松木:本が届かない。

東海林:出来てこない。

松木:お昼から生放送なのに朝になっても出来てないんです。

さらだ:うわお！

松木:生ですよ。12時になったら始まっちゃう。それなのに皆全然慌てない。プロデューサーはじめ役者全員慌てないでのにびりと世間話して。そのうち、やっと届いて。ぺらで印刷がくるわけです。ざっと見て、だいたいアドリブが多いんだよね。それにしても、始まる1時間ぐらい前にちょびっと稽古して。それでいきなりパッと通し稽古を1回やって。だから付いてるほうも大変でね、例えば時間経過なんていうんで時計を1時から、次の場面は夕方だから、6時。

さらだ:ぐるぐるぐる。

松木:回すわけ。

東海林:時計の針を送って。

松木:そういうのも僕達がやったんだけど、最初は手が出ちゃったりするんだ。こっちは初心者だからタリーが点いてるかなんてわかんないでしょ。

東海林:タリー。このテレビカメラが作動中だよって示す赤いライトね。

松木:それが消えるのを待ってバーッとドタバタでやってました。役者の方もいい加減に30分やって。テレビっていい加減だったけど、それでまかり通っちゃ

ってたんですよ。役者さんなんか、来ない人もいっぱいいたんだから。

東海林:出演者が来ないんですか？

松木:だから1人、誰か予備を置いとかなくちゃいけないんです。その予備だったのが愛川欽也なの。

東海林:ああ。

松木:まあその頃無名だったけど。

さらだ:たしか俳優座だったか。

松木:器用ですね、あいつは。なんでも出来るから。「今日は彼が来ないんだ」ってなったら、ディレクターが「欽ちゃんやってくれ」って。もう代役はその場で全部やりました、あいつが。

東海林:そうなんですか。

さらだ:すごい。

松木:だから勉強になったかどうかわかんないけど、とにかくそういう雰囲気だけは勉強になって…。

さらだ:まあ、生放送ってのはそうやって作るんだと。

松木:その時バラエティ番組にもついたの。『みんなでやしまショー』かな。風船割ったり、なんかたわいのないゲームでしたが。

さらだ:おなじ日テレの『底抜け脱線ゲーム』の前身みたいな感じですかね。

松木:それも一緒に手伝いました。

＊

フジテレビ開局

東海林:で、フジテレビが開局してからはフジテレビの番組ですよ、当然。

松木:はい。

東海林:その当時はどういう状況でしたか。フジテレビ開局の日っていうのは、大々的に番組作りしました？

松木:開局前の1週間ぐらいから試験放送が始まって。昼は全然放送やってなくて、夕方ぐらいからやったのかな。ドラマやったりバラエティやったり音楽番組やったり。自分たちがやりたいものを出して。試験放送はそういうふうな具合。それでいよいよ開局というときに、僕が明治座で歌舞伎やってたおかげで開局の1発目をやらされたんです。

東海林:開局記念番組？

松木:うん。『寿三番叟』。

東海林:めでたいやつだ。

松木:鹿内社長の開局挨拶があって、その後にすぐやったんです。ただ歌舞伎俳

優で、勘三郎や歌右衛門だったから、さすがにそれは生じゃなくビデオに録ってオンエアでした。

(00:45:03)

東海林:ビデオがあったんですか。

松木:あったんだよ、それが。その頃のビデオテープってリールがこんな大きいんだよね。

東海林:たらいみたいな大きさですか。

松木:そうそう。それが1本100万円だよ。

東海林:1本100万円のテープ。

松木:だから僕らは通常使えない。

東海林:ちょっと待ってください。当時の1本100万円ですよ。

松木:実際知らないけど、100万円と言われていた。

東海林:今だったら1千万円以上ってことですかね。

松木:そうだろうな。ちょっと考えられない。

さらだ:何分ぐらい録れるんです？ 一回しすると。

松木:2時間か3時間録れるんじゃないかな。でも高価なのでそれを切ったり貼ったり出来ないわけ。

さらだ:そっか。

松木:敢えて切る時は、ラジオのスコッチテープの斜めの。あれをキューっとう切って大きくして。

東海林:すごく大きく長く切るんですか？

松木:うん。それを切る時は許可がいるんです。再利用不能になっちゃうから。

東海林:そりゃそうですね。

松木:で、普通ドラマは全部生だったし。絶対使わせてくれなかったんです。ただ、歌舞伎は、役者が生で来られないし、開局だっていうんでビデオ使わせてもらって、三番叟をやった。それからもう一つ。これが吉右衛門劇団の話。もう一つ、菊五郎劇団って。海老蔵、梅幸。これを使わなくちゃちょっとまずいから。

東海林:両方使わないと。バランスですね。

松木:そうそう。昼から。菊五郎劇団でやれって言われたの。で、海老蔵さん梅幸さんで、『源氏店』をやったんです。これもビデオで録って。だから僕、開局に2本やったんです。

さらだ:すごい。

東海林:ビデオ2本。200万円使ったわけですね。

松木:それがまたひどいんだよ。

東海林:どうしたんですか。

松木:開局の第一発でしょ。『三番叟』でしょ。こっちは朝早くからだから前の晩

から緊張して泊まりで。このときは岡田太郎が手伝ってくれるっていうんで、岡田太郎と2人でサブに座ったわけです。「俺は本番やるから、お前コマーシャルやってくれ」って。コマーシャルはこれナショナル（松下電器）がスポンサーで、ここには逸見ちゃんっていううるさいのがいて…。

さらだ:逸見稔さん。その後ナショナル劇場などを作る方ですね。

松木:その逸見ちゃんが太郎とやった。僕の方はビデオで二つ送り出せばいい(00:47:45)。ところが太郎のほうは生CMなんです。生CMにフィルムを入れるっていうのはすごい難しい。そのためにスタジオを一つ取ったみたいなもの。それで太郎が変なところで押しちゃって。さらに生の切り替えが失敗してめちゃくちゃになっちゃったの。開局一発目からコマーシャルめちゃくちゃですよ。逸見ちゃんが膨れて。平謝りだったけど。

それも謝ってる暇もなく、次昼から『源氏店』があつて。これにしても録る時に、『源氏店』っていうのはいっぱい道具で。お富の家があつて与三が帰って来て、「御新造さんえ、おかみさんえ」ってやる。

さらだ:有名な台詞。

松木:「お富さんえ。いやさお富、久しぶりだな」って、こう一步步々歩きながら台詞言うでしょ。入口から上がり間口までのその寸法があるわけなんだが、テレビのスタジオだと歌舞伎座の舞台みたいな芝居が出来ないわけです。どうしてもコンパクトに、狭くなっちゃう。そうすると海老蔵が「これじゃ2歩で行っちゃうよ。御新造さんえ、おかみさんえ、お富さんって言えねえじゃん」ってへそ曲げちゃって。言われてしょうがねえから、大道具さんに頼んで、ちょっと寸法を作ったら、横に細長くなっちゃって。お富と与三郎のツーショットが撮れないんです。

東海林:今度は離れ過ぎちゃって。

松木:ひどい画になっちゃって。おまけに木更津の海が向こうにちゃんと出来てんだけど、それが見切れちゃって。でも誰も気にしなかったけど。

さらだ:でもそれがテレビの開局のハプニングで。

松木:歌舞伎の俳優さんっていうのはなかなかうるさいんだ、いろんなこと言つて。ニッポン放送時代、中継に行つてマイク立てるだけでも大変だったんです、はじめは。

(00:50:04)

東海林:そんな所に立てるなとか、目立つから邪魔だとか。

松木:で、いちいち中継の前は部屋回つて挨拶しますよね。

東海林:今もそうなんですかね。

さらだ:どうなんですかね。

松木:今は違うよ。もう進んでるよ、昔は駄目だったんだよ。

＊

脚本家として立つことに…

東海林:開局の番組の話でずっと盛り上がっちゃったんですけど、そろそろ松木さんがテレビの台本とか脚本とか書かれるようになったのはその頃ですか？

松木:書きませんよ、結局。

東海林:結局書かれてないんですか。

松木:書いちゃいけないんだもん。

さらだ:やっぱりそれは、テレビに行っても。

松木:うん。

さらだ:試験放送用は良かったけど。

松木:そうそう、書いてない。もちろん辞めるまで書いてません。ただ、本当は書いたんです。っていうのは、連続ドラマで本来演出担当の僕が脚本を担当した回があり、まあいろいろやってたんです。最後に担当した『ぼうふら紳士』っていうので。

さらだ:コメディ？

松木:そう。三井弘次さんと桂小金治と。

東海林:桂小金治さん。懐かしいですね。

松木:守屋浩。それから市川和子とか。そういう連中でやってたんですけど。それも、毎週30分の生ドラマだったんです。その本を書いたのが、岡田教和（のりかず）っていう菊田さんの弟子なんだけど。それとつんべの愛称で知られた津瀬宏。彼は右手がなかったのかな、手首が。

さらだ:清水東さんのお父さんですね。息子が有名な放送作家になって。

松木:そうですか。へえ。

さらだ:津瀬さんの伝説は、この番組でもいろんな方が。なので聞きたいです。

松木:面白い奴だね。片手で書いてて、とにかく本が遅いんだ。教和も遅い。

さらだ:岡田教和さんが遅い。

松木:つんべも遅いんです。それなのにどういうわけか二人に頼んじやった。僕が『ぼうふら紳士』のディレクターで。そうしたら来ない来ない、本が。

東海林:生放送なのに。

松木:それも土曜日の7時から生放送だったんですけど。

東海林:夜の7時ですか？ 今で言うとゴールデンタイムですよ。

松木:そうですね。はじめの三、四回は良かったんだけど。だんだん書かなくなつて。ある日突然金曜日の夜、「教和まだか？」つったら、「松ちゃんごめん。どうしても書けないんだ」っていうんです。「書けないって明日放送だから書

いてくれよ」つったの。「どうしても書けない。勘弁してくれ」って言うの。つんべに、しょうがないからかけた。じゃ、つんべ飲みに行っちゃっていないんです。あいつものんべえだから。で、しょうがねえな、つつつたら、ノリカズが「お前書いてくれ」って、半べそかいてる。

東海林:お前書いてくれ？

さらだ:松木さんに書いてくださいって？

松木:うん。しょうがないから、「じゃあ書こう」って書いて。で、岡田教和の名前で次の日出したんです。だから感謝の挨拶かなんかあって、ギャラも当然こっちにくるんだろうと思ってた。でもひとつこともない。なんだよこりゃ。で、とにかく一晩で書いて間に合わせてやったんですけど。当時僕の給料は3万円なかったんです。ところが教和の脚本料が3万円なんです。「あれ？ 一晩でこんな。四、五時間で3万円」。俺は朝から晩まで働いて月に3万円。馬鹿馬鹿しいなと思って、「俺、本書こうかな」。

東海林:それがきっかけ？

松木:本職にしようかなと思ったのはそれ。だって一晩で1ヶ月分でしょ。それで決心して、局に「辞めさせてください」と。名ディレクターが辞めるんだから、たぶん引き止めてくれるだろうなと思っていたら、「ああ、どうぞどうぞ」ってあっさり（笑）。ただ、スポンサーがロート製薬で。

(00:55:02)

東海林:懐かしいですね。

松木:その人にかわいがってもらったもんだから、ロート製薬の連中が承知しなかったんです。「辞めるんだったら…」。

東海林:「うちも降りるぞ」と。

松木:いやいや。

東海林:言わなかった？

松木:「来週から、このドラマ書け」と。

東海林:あっ、なるほどね。

さらだ:『ぼうふら紳士』を。

松木:それで辞めて。退職金が10万円ぐらいかな。

東海林:退職金10万円。でも、開局の一年ぐらい前に、ぼうふら紳士が三年ぐらいだから、勤めて三年か四年ぐらい。

松木:うん。それで次の日から、ディレクターで座ってた席の後ろに行って放送作家になってるわけ。脚本家に。それで、テレビは書いたって言えば書いたわけだ。フジテレビいた頃でも、他人の名前で。

東海林:はい。ということで。お話は面白かったんですけど。

松木:すいません。適当にカットしてください。

東海林:いやいや。ラジオからテレビ行って、それで松木さんがテレビの台本を書かれたと。デビューしたのは実験放送だったと。

＊

今回は脚本家として独立した後を

さらだ:ええ。来週いろいろ伺うけど。あの名作の『池中玄太80キロ』を書いた松木さんがこういう形で脚本家になっていったという…。

東海林:脚本家になっていったという道筋というのがすごく、興味深かったです。来週は、今度は脚本家として独り立ちして、数々の石立ドラマとか、池中玄太とか生んだお話を伺いますので。

松木:あいわかりました。

東海林:また来週よろしく願いいたします。

松木:どうも。悪声ですいません。

東海林:いえいえ。今夜のお客様は松木ひろしさんでした。どうもありがとうございました。

さらだ:ありがとうございました。

東海林:今夜は松木ひろしさんをお迎えいたしましたけど。三田佳子さんの名前の秘密がわかりましたね。

さらだ:そう。

東海林:駅名だった。

さらだ:そうそう。都営三田線。

東海林:三田駅に着いたから、「あ、三田佳子でいいじゃないか」。これ、すごい単純ですよ。

さらだ:いやいや（笑）。

東海林:あとテレビ出演者が来ないと、誰の役でも出来るぞっていうスタンバイだった愛川欽也さん。

さらだ:そういう、苦労というか駆け出しの頃の実績があって、実力派と言うか大スターが生まれていくんでしょうね。

東海林:そうですね。

さらだ:私たちそういうふうな修行してたかな、なんて。してないわね。

東海林:してたことにしよう。でもほんと、コツコツやることが大事だ、って。

さらだ:そうそう。

東海林:きょうはドラマの脚本の話が全然出来なかったから。テレビ創成期とかラジオ創成期の話。

さらだ:でもそれ自体がドラマだった。

東海林:面白かったです。ということで松木さん、来週はちゃんとしたドラマの脚本のお話とかを伺おうと思います。今夜もそろそろ閉店のお時間です。お相手はマスターの東海林桂と。

さらだ:ママのさらだたまこでした。

東海林:それではまた来週。

さらだ:さようなら。この番組は日本放送作家協会の制作協力でお送りしました。

(00:59:05)